

3月8日、政策秘書課、経営企画課職員と話した内容です。

人力と動力

私の両親が、昭和26年から46年頃まで書いていた日記が見つかりました。書いてあることは、我が家は農家だったので、いつ粃をまいた、種をまいたなど、農作業のことが中心で、そのほかはご近所づきあいのことでした。

昭和41年の春、我が家では耕運機を買いました。それ以前の日記には、田植えの前は、家族総出で鋤を使って田起こしをしたり、近所で早くに耕運機を買った家に借りに行ったりしたことが書かれていました。田植えや稲刈りの際には、リアカーで道具を運び、近所のおばさん達に手伝ってもらったこと、家を直した際には、近所の誰々に準備を頼み、大工には日当をいくら払ったかが、細かく書いてありました。そのほかにも、「〇〇さんの体調が悪いので、見舞いに行った」「今日も〇〇さんの見舞いに行った」などが書かれていました。

耕運機という動力を手に入れる前は、すべて人力で作業するしかなく、他人の力を借りないと、生活ができない時代でした。だからこそ、ご近所との付き合いを大切にしていたことが、日記の記述からも分かります。

ほんの50年前まで、私たちは、ご近所に頭を下げて、互いに助け合いながら生活をしてきました。ところが、耕運機といった動力を手に入れたことで、他人の手を借りなくても生活ができるようになりました。そうした効率的で便利な生活と引き換えに、耕運機の月賦やガソリン代を稼ぐために、市外へ働きに行くようになり、近所の人に頼んで、一緒に作業をする機会は減っていきました。

人力の時代は、相手を待つことができました。動力を手に入れたことで、早く、効率的に作業が出来るようになった一方、待つことができなくなりました。また、お金を通しての関係が増え、その結果、「お金を払う方が偉い」という考え方の人が多くなり、互いに不寛容になっていると感じます。

地域だけでなく、家族関係にも、待つことができなくなったこと、不寛容となったことが波及していて、それが引きこもりや虐待、心の病、不登校、いじめ、自殺、孤立死などの問題として表れていると思います。こうした問題が増えているならば、私たちは、暮らし方を今こそ、見直す必要があると思うのです。



耕運機を買ったころ

50年前から先人たちが、都市基盤整備を進め、便利で快適な長久手市をつくってくれました。今の長久手市に一番足りないのは、地域のつながりです。50年後、100年後を見据えて、地域のつながりを取り戻すために動き始めませんか。そして、将来にわたっても素晴らしい長久手市を子ども、孫達に残そうではありませんか。

～市長の話を聞いて～

以前、市長から「目標は、遠くに設定するとブレない」とアドバイスを受けたことがあります。例えば、「月に行く」という目標であれば、アメリカ経由、ロシア経由等、いろいろな方法を考えられますが、「藤が丘に行く」となると経路は限られ、発想も広がりません。確かに私も、すぐ目の前のことだけに捉われ、そもそもの目標を忘れて仕事をしているときがあります。

50年後、100年後の長久手市の姿を一人ひとりが想像し、それをみんなで共有することで、そこに向かって、豊かな発想で紆余曲折を繰り返しながらも、進んでいくことができるのだと思います。